
パンダのサンデー

カルマ20号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダのサンデー

【Nコード】

N7559S

【作者名】

カルマ20号

【あらすじ】

私とサンデーの物語。彼はとても優しくてふわふわだった。

サンデーが死んだ。死んだと言っても生物じゃない。ただのパンダのぬいぐるみだ。いや私にとってサンデーはただのぬいぐるみじゃない。親友だ。小さい頃からずっと一緒だった。サンデーが死んでしまった。

私がこの家に来たのはちょうど六歳の誕生日。『パパ』に連れられて大きな家に着いた。先生は、幸せになれるからと言っていただけちょっと怖かった。そして家で待っていた『ママ』が誕生日プレゼントを用意していたのだ。その時の言葉を今でも覚えてる。

「はじめまして詩帆ちゃん。今日から親子なのにはじめましてと言うのも変かしら」

そう言っママは笑った。鈴を転がすような優しい笑い方で知らない場所へ来て緊張していた私も少し落ち着いた。

「そうそう、プレゼントがあるのよ」

ママは後ろからその時の私の身長くらいある大きな大きな包みを出した。

「気にいってくれるかしら。一生懸命選んだのだけど」

包みから出てきたのは大きなパンダのぬいぐるみ。ちょっと太っちょで眼がまるくて毛がふわふわだった。私はしばらく突付いたり撫でたりしていたがやがてぎゅっと抱きしめた。

「気にいってくれたみたいね。嬉しいわ。そうだわ、その子に名前を付けましょう。詩帆ちゃん、何がいいかしら」

私は驚いてママを見た。口を真一文字に結んでじっとママを見た。今でもそうだが何かを決めるのは苦手だった。

「うーん、どうしましょう。この子も名前がないと可哀想だし」

ママは困った顔をしていた。私は勇気を出した。本当に勇気の必要なことだった。

「この子に名前付けて……ま、ママ」

ママは一瞬きょんとんとして、それから嬉しそうに微笑んだ。パパからそう呼ぶように言われていたけど、こんなに嬉しそうに笑ってくれるとは思ってなかった。その顔を見て私も嬉しくなった。

「そうね、じゃあサンデー。今日は日曜日だから。詩帆ちゃんとママとサンデーは日曜日に会いました」

そのとき、その言葉の意味はあまりよくわからなかったけど、それが私とサンデーの出会いだった。

それからはずっとサンデーと一緒にだった。小学校に入ったときもサンデーを学校に連れていこうとしたくらいだ。やがて成長してぬいぐるみで遊ばなくなってもサンデーは私のベッドに置いてあった。ふわふわだった毛もごわごわしてきて魅力的とは言えなかったけど私はサンデーを離さなかった。

好きな男の子のことを話したのもサンデーが最初だったし、悲しいときはサンデーのお腹に顔を埋めて泣いた。どんなときもサンデーは私を受け入れてくれた。

私の十六歳の誕生日のとき、高校で知り合った彼にねだってサンデーより小さめのパンダのぬいぐるみを買ってもらった。小さめといっても両手でやっと抱えられる大きさだったけど。彼は子供っぽい私の趣味と予想外のぬいぐるみの値段に半ば呆れていたけど私は大満足だった。

その日は水曜日だったのでウエンスデーと名付けた。

その日からサンデーとウエンスデーは並んで私のベッドにいた。さすがに二匹もいると私が眠れないので寝るときは床に下ろした。私は幸せだった。パパとママと彼とサンデーとウエンスデーがいた私の幾つになっても終わらないぬいぐるみ趣味に最初にプレゼントしてくれたママもちょっと驚いていたけど、はじめて会ったときと変わらない笑顔で「詩帆ちゃんも好きねえ」とだけ言った。

緩やかに時間が流れて私は変わっていった。その時はまだママの笑顔のように変わらないもののほうが多い、と思っていた気がする。でもそんな私の思いとは裏腹に彼もまた変わっていった。何が原因だったのだろう。今でも私にはわからない。クラスが別になったときからか、進路に対する考えの違いから口論をしたときからか。私と彼との関係は徐々に冷めたものになっていった。

そして彼との終わりのときが来た。彼の浮気疑惑とか受験のストレスでナーバスになっていた私はきっかけさえあれば壊れそうなほど追い詰められていた。そしてきっかけは彼の些細な言葉。その言葉は今ももう思い出せないが最後に彼が言ったことはよく覚えている。

「お前はさ、結局、俺のことぬいぐるみ程度にしか思ってないんじゃないの？」

否定したかったけど上手く言えなかった。その代わりに私の口から思いもしない言葉が出ていた。

「あんななんかぬいぐるみ以下ね。少なくともぬいぐるみは私を傷つけたり裏切ったりしない」

そんなこと、思ってたなかった。どんなに冷めていても私はまだ彼のが好きだった。泣いてすがれば別れないで済んだかもしれない。でも終止符をうつたのは私自身だった。

その夜、私はサンデーのお腹に顔を埋めて泣いた。そうやって泣くのは久しぶりだった。なぜか後ろめたい気分がしたのでウエンスデーの顔は見る事ができなかった。

そして彼から貰ったものを全部捨ててしまった。そうしたほうがいいような気がした。

手紙も鞆も指輪もみんな捨てた。

ウエンスデーを捨てるかは最後まで迷ったけど、都合よく虫干しのためリビングに運んだウエンスデーにママがコーヒをこぼしたのでそれを理由に捨ててしまった。

その日からベッドにはサンデーだけがいた。その姿がどこことなく

寂しそうに見えたのは私の本心がそうだったからだろう。彼とウエ
ンズデー、大切な一人と一匹を失ってしまった。そのときもママは
余計な詮索をしなかった。正直、ありがたいと思った。

やがて私は地方の大学進学が決まり一人暮らしを始めることにな
った。当然、サンデーも一緒に連れて行くことにした。

パパが探してくれた部屋は一人暮らしをするのには十分な広さだ
ったので、私は貯金をはたいてサンデーが座る用のソファを買っ
た。真新しいソファに座る年季が入ったサンデーの姿は妙に愛ら
しくてちよつと笑えた。そして私は慣れないながらも快適な生活を
サンデーと共に送った。

だけどそんな生活は唐突に終わりを告げる。

妙に寝苦しくて目が覚めた。熱い。ドアを叩く音が聞こえる。

「梶原さん、逃げてくださいっ！火事です、火事ですっ！」
その声で本格的に目が覚めた。気がつけばどこからか煙が部屋に
入り込んでいる。跳ね起きてドアへと向かう。途中、まともに煙を
吸い込んで意識が遠のいた。それでもなんとかドアへとたどり着き
チエーンを外し扉を開く。

ドアの外にいたのは消防服を着込んだ人だった。その瞬間、私は
気を失ってしまった。

気がついた時には火事はおさまっていた。私の住んでいるフロア
を焼き尽くして。サンデーはいつもと同じように私の部屋の真ん中
に置いているソファに座っていたはずだ。サンデーが無事でない
ことは一目瞭然だった。炎の中、サンデーのプラスチックで作られ
た瞳は何を映していたのだろうか。サンデーは死んだ。燃えて灰に
なってしまった。

今、私は検査のために運ばれた病院の一室で泣いている。子供の
ように声を上げ、涙と鼻水で顔を汚して泣いている。

サンデーが死んだ。サンデーが死んだ。それ以外、何も考えられない。なぜ私はサンデーを連れて行かなかったのだろう。どうして気がつかなかったのだろう。後悔だけが私の心を支配していた。

誰かが実家に連絡をしてくれたのもうすぐママがやってくる。こんなひどい顔じゃ会えないと思いつつも涙を止めることは出来なかった。

部屋にノックの音が響く。

「詩帆ちゃん、入るわよ」

ママだった。ぐちゃぐちゃの顔のまま、ママを迎えることになった。

「あらあら、まあまあ」

私の酷い様子にママは驚いたようだった。けどすぐにいつものように私に話し掛けた。

「とにかく詩帆ちゃんが無事で良かったわ。サンデーは残念だったけど。」

ママは私がなぜこんなに悲しんでいるのかすぐに悟っていた。思わず抱きついて泣きじゃくる。

「そうね、悲しいわよね。大切な友達だったもの。うんと泣きなさい」

ママは限りなく優しくかった。

数週間後、新しい部屋も決まり私の生活も元に戻ってきた。火事の原因は同じフロアに住む学生の煙草だったらしい。なぜか怒る気はしなかった。火事による死傷者は通報が早かったこともあって0だった。少なくともニュースではそう伝えられた。

でも私の部屋にサンデーはいない。まだこの傷は癒えてない。私のあまりの落込みぶりを心配したパパは新しいぬいぐるみを買って言うてくれたが断った。私にとってサンデーはサンデーだけだから、他の物はいらぬ。一人で寝るベッドはこんなに広いのかと思いつながら、私の本当の一人暮らしは今日も続いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7559s/>

パンダのサンデー

2011年4月26日11時25分発行